

第二通 出家の姿を示さない理由(出家発心章、一帖目)

「現代語訳」

わが浄土真宗、すなわち親鸞聖人のみ教えの特徴は、ことさらに出家して菩提心(悟りを求める心)を起こす姿をとったり、また、家を棄て欲を捨てる姿を表にあらわすことではありません。ただ、ふたごころなく阿弥陀如来の仰せに従う他力の信心を決定せしめられたとき、お救いにあずかるので、男性、女性、老いた者、若い者という外面的な姿によるわけへだてはまったくありません。

ですから、この信心を得た位を『大無量寿経』には「即得往生住不退転(本願を信じたそのときに浄土に往生することが定まり、迷いの境界にあともどりすることのない位につく)」と説き、曇鸞大師の『往生論註』には「一念發起入正定之聚(本願を信ずる心の起こったそのとき、往生が定まり、かならず仏となる者たちの位に入る)」ともいっています。これは、「不来迎(臨終の際に仏・菩薩が来迎することを要請しない)」といわれるみ教えであり、また、「平生業成(阿弥陀如来の本願を信ずる心の起こった平生のときに往生の因が成就し、浄土に生まれることに定まる)」の教義です。

親鸞聖人の『高僧和讃』源信大師の章には、こう詠われています。

「弥陀の報土をねがうひと、外儀のすがたはことなりと、本願名号信受して寤寐にわすることなかれ(阿弥陀如来の極楽に生まれることを願う人は、外に表れた姿は各人さまざまであっても、本願のお名号、すなわち南無阿弥陀仏を疑いなく心に受け入れ、寝ても醒めても忘れてはなりません)。「外に表れた姿」とは、在家とか出家とか、男子とか女人とか、そういう外面的な姿によってわけへだてをしない、という意味です。

次に、「本願のお名号、すなわち南無阿弥陀仏を疑いなく心に受け入れ、寝ても醒めても忘れてはなりません」とは、外に表れた姿がどんなであっ

ても、また十悪(殺生・偷盗・邪淫・両舌・惡口・妄語・綺語・貧欲・瞋恚・邪見)、五逆(殺父・殺母・殺阿羅漢・出仏身血・破和合僧の五つの反逆罪)、闍提(仏の教えを信じず、一切の善を失っている者)という重罪を犯した者たちであつても、自分の力をあてにする心を捨てて悔い改め、「こんな浅ましい者をお救いくださる阿弥陀如来の本願であらせられる」と知らせていただいて、ふたごころなく如来にお従いする心が、寝ても醒めても持続して絶えることのない、そのような人を「本願にお従いする、決定心を得ている信心の念仏者」といつのだーといつことです。

そこで、このうえは、歩いていても、止まっても、坐っていても、臥せていても、いつも称えるお念仏は、すべて阿弥陀如来のご恩にお応えするお念仏であると思ふべきです。これを「真実の信心をいただいた、往生の決定した念仏者」と申します。あなかしこ、あなかしこ。

あつき日に ながるるあせは なみだかな かきおくふでの あとぞおかしき
(暑い夏の日に流れる汗は、文の拙さへの恥ずかしさの涙のようです。書き終わったこの手紙のなんとお恥ずかしいことでしょう)

文明三(一四七一)年七月十八日

(浅井成海監修『蓮如の手紙 お文・ご文章現代語訳』より)